黄鶴

kou kaku

No.20

2011年

国指定特別天然記念物

田島ヶ原　サクラソウ　山根悦子画

特集　川村学園の災害対策

川村学園女子大学附属保育園

小学校での授業体験

川村幼稚園

すてきな1日、誕生会

川村小学校

学年をこえた交流と学び合い

川村中学校

自然教育の取り組み

川村高等学校

新しい教科紹介

川村学園女子大学

活躍している学生Ⅱ

キャンパス紹介

今夏、目白キャンパス第1グラウンドは、人工芝への改修工事を終えました。お披露目をかねて9月25日には、川村幼稚園「キンダーファミリーパーティー」を開催しました。

学校法人 川村学園

東日本大震災により被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げます。

特集 川村学園の災害対策

中高校舎リニューアル工事では、最優先で耐震強化にあたりました。

3・11東日本大震災

東北地方太平洋沖地震が発生した平成23年3月11日。目白キャンパスには6時限目の授業中であった高校生、年度末にむけ大掃除に取り組んでいた中学生、そして小学校の謝恩会に出席をしていた6年生とその保護者がいました。大きく長い揺れを感じましたが、皆冷静に対応し、幸いにしてけが人や校内の被害箇所はなく、中学・高校においては、全員の無事を確認後、速やかに保護者にむけて学校情報連絡システムでのメール配信を行うことができました。しかし、大地震発生の混乱は収束せず、交通機関の混乱等により学校での宿泊を余儀なくされました。（小学校は午前中に卒業式の予行練習を行い、会食なしで5年生以下は下校、幼稚園も午前保育であったため、園児は降園をしていました。）

第8校舎にいた高校生は、自家発電装置のある第2校舎へ移動。中高生に一人ずつ非常食、飲料水、保温アルミシートの入った防災セットを配布。夕食に、非常食のスティックパン、クラッカーを食べ、教室には担任が入り、少しでも不安が拭えるよう声かけをしました。生徒は横になって仮眠をとりながら夜通し保護者の迎えを待つこととなりました。朝を迎える頃には、生徒は220名となり、再度防災セットを配布。店舗の開店を待ち、サンドイッチや調理パン、菓子パンを購入し、提供することができました。最終的に校内に残った生徒は、家庭と連絡をとり、交通機関の復旧にともない教員が方面別に引率をし、午後2時半に下校が完了しました。

小学6年生は保護者と一緒であったことが何よりで、家庭ごとに帰宅されました。帰宅が困難な家族には、一人ずつ防災セットを配布、待機場所としたフリールームに宿泊された家庭が13組。夜中にも迎えがあり、翌朝6組が残りました。その後、各方法を見出し、午前9時半には全員が帰路につくことができました。

次に我孫子キャンパスの様子をお知らせしますと、大学には、授業期間中ではありませんでしたが、キャンパス内には50名の学生と5名の教員、通常体制の職員がいました。揺れの最中は身の安全を確保し、揺れが収まった後に非常放送を流し、グラウンドに集合、負傷や体調不良の有無の確認を行いました。その後、1階建ての10号館学生ホールに待機場所を移すとともに、飲料水の確保、トイレ排水の確保、照明の確保、公衆電話を利用しての家庭・保護者との連絡、各学生の帰宅方面の把握、鉄道運行状況の把握及び夕食・朝食の確保に努めました。保護者の迎えがあった学生もいましたが、32名の学生と4名の教員及び半数以上の職員が学内で宿泊することになりました。

また、保育園には園児92名がおり、0～4歳児は午睡の時間帯でした。職員が園児を目覚めさせると、頭から布団を掛けて落下物から身を守りました。5歳児は、すばやくヘルメットをかぶり机の下にもぐり、揺れがおさまるのを待ちました。停電のため電話、パソコンは使用不能となり、園としては、園児の安全を確保しながら、ひたすら保護者の迎えを待つのみとなりました。電車などの交通機関も止まり、結局、園児1名を預かったまま職員とともに待機を続けることになりました。そして翌日の昼に保護者の迎えがあり、全員が帰宅の途につくことができました。

学園では、この体験を活かし、これまでの対策の見直しを開始しました。大震災が創立の契機となった川村学園。当時の創立者の想いとあわせて強化した災害対策を報告します。

一日も早い被災地の復興と平安を願い、義援活動を継続してまいります。

川村学園創立の契機

ご存知の通り学園では永年にわたり、日頃の教育のなかで防災頭巾の携帯や毎月の避難訓練の実施、方面別通学班編成など、災害から身を守るための取り組みが継承されています。また、在校生の安全を第一に考えた施設・設備等の環境整備にも力を入れてきました。これらの方針は、創立の契機が大正12年9月1日に発生した関東大震災にあることの表れとなります。東日本大震災からの復興に向けて動き出すなか、川村文子先生の学園創設にかけた当時の熱き想いは、今の私たちの大きな支えになるとともに、しっかり前を見据えて歩むことの道しるべとなりました。「女性の自覚」を大きな柱とされた文子先生、その想いを当時の文献より紹介します。

『川村女学院十年史 ―序にかへて―』

過ぎし十年の回顧より

私はあの折には、当時満鉄の総裁をつとめておりましたところの主人にすすめられて、大連にいったのでございました。あちらにおりまして、大事変の報道をうけた私は直ちに帰国の途に着いたのであります。（略）

当時我が国の方々が大震災から受けました衝動は、随分に大きなものであったと思いますが、私もまたその一人でございました。本当に真剣にならなければ、帝都の復興は愚か、国運の発展は到底期し難いと、心から思いました。そして私はこれは男子だけがしっかりしたのでは駄目である、女性がしっかりと女性の本来の使命に目覚めて雄々しく動き出す事が、最も大切なことであり、最も根本的なことであると痛感いたしたのでございます。

「女性の自覚」という事に、前途の光明を見出して、周囲を眺めた時に、平生からの考え―教育界に尽したいという考え―を是非共実現しなければならないと深く決意したのでございます。

川村学園ではこうした創立の契機を振り返り、東日本大震災を第二の出発点ととらえ、建学の精神を礎に教育活動に邁進しています。そして、被災された方々の助けとなる取り組みを継続して行い、学園内での災害対策を徹底させていきます。

折りしも、進行中の中高校舎リニューアル工事では、最優先で第2校舎西棟の耐震補強工事に取り組み、その後の一連の工事もいよいよ完成を迎えることになりました。

目白キャンパス、我孫子キャンパスの校舎は全て、充分な耐震性を備えた安全・安心な建物となっています。近い将来発生が懸念される東海地震を含め、震災後日本が直面している問題は山積していますが、刻々と変化していく状況を敏速にとらえ、学園として冷静な対応をとっていきますので、引き続きご理解、ご協力をお願い申し上げます。

川村学園震災対策

1. 震災予防措置
2. 震災時の活動
3. 震災後の復旧計画
4. 警戒宣言が発せられた場合の対策
5. 防災教育及び訓練

平成23年4月1日施行

上記の項目に分け、災害発生に備えた準備、在校生の安全を確保するための取り組み等を定めています。教職員は、指揮班、通報連絡班、消火班、避難誘導班、安全防護班、救護班を校舎別に編成し、活動にあたります。東日本大震災の経験を生かし、災害発生後の地震対策委員会の招集、地震後点検と安全措置、帰宅困難者対策、電気、ガス、水道、通信等途絶時の対策などを迅速かつ的確に行うことができる体制を組んでいます。

災害対策をお知らせします

- 学園
- 幼稚園・小学校・中学校・高等学校
- 大学
- 保育園

目白キャンパス

▶ 防災担当者会議での協議・確認事項 ◀

各校より防災担当者が集まり、安全確保のための取り組みを協議し
共通認識として対応にあたります。

- 移動時の防災頭巾携帯の徹底
- 場面別避難訓練の実施
- 各校における通学班の活用と連携
- 学校に宿泊する際の準備
- 備蓄倉庫の内容確認
- 学内危険箇所の確認
- 避難経路の確認
- 在校生緊急連絡先の把握
- 安全のため携帯電話を所有している在校生の電話番号の把握
- 在校生と送迎が必要な幼稚園の保護者への帰宅経路MAPの作成・携帯を喚起
- 徒歩や自転車で通学できる在校生の把握
- 校外学習時の緊急事態発生にそなえたマニュアル作成（我孫子キャンパスでの行事含む）

▶ 保護者との連携と情報伝達 ◀

在校生を事態の一定の収束がみえるまで学校に待機させ、
保護者に対して必要な情報を迅速に発信し、不安が拭えるよう努めます。

- 原則として、保護者の迎えがあるまでは在校生を学校で預かる方針の周知と学校までの引き取りの依頼
- 通学途中の災害を念頭にした家庭においての約束ごとの話し合い（最寄りの避難所の確認、どの地点なら自宅、どの地点なら学校へ向かうかなど）
- 学校情報連絡システム（一斉メール配信）の活用
- 学園ホームページへの緊急連絡の掲載
- 自宅待機が必要な場合の課題等の準備

我孫子キャンパス

▶ 大学での新たな取り組み ◀

- 電車不通区間対象地域の新入生に対し、車通学を許可
- 4月2日～5月6日の間は18時を完全下校時刻とし、また、毎日昼休みに地震発生時の身の安全確保対処について学内放送を実施
- 6月から閉門時刻の20時までの時間帯において、地震等災害により鉄道が不通となり校内にいる学生の帰宅が困難と見込まれる状況が発生した場合に、帰宅した職員の勤務に参集する体制を準備
- 被災した学生に対する精神的相談支援の強化
- 被災地在住の卒業生に対して、流失してしまった学位記及び卒業アルバムを再交付

▶ 保育園での新たな取り組み ◀

- はだし保育をやめ、いつでも屋外へ避難できるよう上履きを導入
- 午睡時には、枕元に上履き・ヘルメットを置き、遊戯室での行事では、各自椅子の下にヘルメットを置き、安全を確保
- 行事開始前は、非常事態に備えた出口確保や誘導などの職員分担を確認
- 両親以外の送迎代理人にも協力を仰ぐ体制となる「災害時送迎対応確認」を作成

▶ 保護者への情報提供 ◀

- 保護者会、個人面談、夕涼み会等の機会を活用し、保育園での取り組みや対応などを説明
- 市が測定した放射線量の測定結果を掲示

小・中・高合同通学班編成の実施（9月12日）

場面別第2回避難訓練の実施（6月21日）

▶ 節電対応 ◀ 学園全体で節電に取り組んでいます。

- 節電事情に対応するため電気を熱源とする空調設備の校舎から、ガスを熱源とする空調設備の校舎に授業を移した
- 真夏の節電対策に伴う夏期休暇延長と授業数確保の対応

今夏の対応報告

大学　：前期授業終了を1週間早める措置をとる。
中学・高校：夏期休暇を9月11日まで延長。月1回の土曜休日は、5月から7月まではなし。
7時間授業を5月23日～7月1日の間実施。
小学校　：夏期休暇を9月11日まで延長。月2回の土曜休日は、5月から11月まで月1回とする。
幼稚園　：夏期休暇を9月11日まで延長。夏休み前後の午前保育を平常保育とする。

▶ 安心して通学できる学校を目指して ◀

東日本大震災後の
東京電力福島第一原子力発電所事故による影響への対応をとっています。

- 会食、給食の食材確保と産地についてのお知らせ
- 放射線の影響を軽減するため、グラウンドの表土を削り、芝生の刈り込み回数を増やす措置
- プール遊びや外遊びの回数の削減や時間の短縮

▶ 被災した在校生に対する経済的支援 ◀

- 『東日本大震災の被災者に対する災害見舞金及び奨学奨励資金特例規程』を施行
- 他の奨学金の紹介・推薦
- 学費の分割・延納
- 外部の財団法人が行う給付型の奨学金への推薦

▶ 義援活動 ◀ 創立の契機にたちかえり、被災をされた方のために、自分達にできることを継続して行っていきます。

- 朝の読書の時間を使った義援バザーにむけた手づくり品の作成（中学・高等学校）
- 義援金箱の設置（小学校・後援会総会）
- 義援バザーの開催（4月25日・7月15日開催）
- 寄せられた義援金や義援バザーの売り上げと合わせ、学園として義援金17,420,394円を日本赤十字社へ寄付（6月20日）
- 平成22年度卒業生と卒業パーティー実行委員の呼びかけにより、卒業生、在学生、教職員から義援金を募り日本赤十字社へ寄付（4月6日）
- 我孫子市からの要請により、福島県相馬市へ送る救援物資を在学生及び教職員に募り、布団、お米、インスタント食品、ペットボトル入り飲料水等の物資を我孫子市へ（4月15日）
- 被災地である地元地域（我孫子市）に対し、在学生及び教職員から義援金を募り「我孫子市災害復旧事業費」に寄付（4月27日）

義援バザーには様々な手づくり品が並びました。

小学校での授業体験

就学前の5歳児が小学校を訪問し、授業体験によって入学を楽しみにしています。

23年度になって、初めて実施した5歳児の小学校の授業体験は、「学校を訪問・体験することで、より具体的に学校を理解し、入学することを身近なことに感じ、楽しみに待てるようにする。」ことを目的に、①学校内の見学②席に座っての授業の体験等をしました。保育園では5歳児が就学に向けての、初めての授業体験を、我孫子市立我孫子第二小学校でさせていただきました。出迎えてくださった校長先生に緊張した面持ちで「よろしくおねがいします。」と挨拶をし、学校内を見学しました。

校長先生の案内で、1年生の教室に入り、1組では算数の授業を見学。教科書をのぞき込んでいた園児ですが「?・?・?」授業の様子を静かに見学していました。

2組の教室では国語の授業を見学。教科書を読んでいるのを聞いて「?・?・?」授業の様子を静かに見学していました。

3組の教室では音楽の授業を見学。カスタネットを使い「げんこつ山の狸さん」の歌とリズム打ちの授業を見学。途中1年生のお兄さん、お姉さんの案内を受け、席に座って歌を歌ったり、カスタネットの説明を受け、リズム打ちを一緒に楽しみました。学校では一人用の机と椅子で保育園との違いもあり、緊張したまま手をひざに置き、シャキッと座っていたのが印象に残ります。

体験後の5歳児の感想は「楽しかった！」でしたが「ドキドキして緊張したの！」が実感のようです。子どもたちも真剣に受け止め、小学校に対する期待も膨らむ有意義な体験ができたと思います。

園児だけでなく、5歳児の担任としても「施設（教室・トイレ・水道・下駄箱）の様子を見ることができた。」「就学前の保育の計画として『自分の名前が書ける』『簡単な文章が読める』『数字がわかる』などの進め方をしたが、実際の授業の状況を見ると、就学し間もなく『文字を書く』ことが始まっているので、今後の指導内容をより具体的にすることができた。」との感想がありました。

学校では保育園よりも少し長い間椅子に座る経験や、物の自己管理、時間で判断して動くことや集中する時間の多さなどたくさんの事を学ぶことができました。就学に向けて様々な事に少しずつ取り組んでいきたいと思います。

授業体験に続く次の学校との交流は、10月20日の給食体験となりました。保護者からは、「とてもいいことですね。」と言っていただきました。

1年生がカスタネットを貸してくれました。

小学校の楽しいところを教えてくれました。

保育園と我孫子第二小学校との交流

6月16日、5歳児が近くの小学校を訪問。校長先生による学校案内と1年生の2校時目の算数、国語、音楽の授業を体験・見学しました。

我孫子市では、幼稚園、保育園、小学校との連携や交流を推進しており、今回の体験授業もこの一環の取り組みとなっています。

進学する小学校は様々となりますが、みな一様に小学生に対する憧れが増す経験となりました。

すてきな1日、誕生会

今年から、おうちの方をお招きしています。

川村幼稚園には、子ども達が楽しみにしている行事がいくつもあります。その中でも、一人ひとりの園児と保護者が特別な思いをもって迎える行事、それが創立以来続いている誕生会です。

保育室には月ごとの誕生者がわかるように、壁面に誕生日表が飾ってあります。子ども達はそれを見て自分の誕生日はもちろんのこと、お友達の誕生日も楽しみにしています。

これまではずっと園児だけで行っていた誕生会でしたが、今年度よりご家庭から保護者の方をおひとりお招きして、一緒にお祝いをしていただくことにいたしました。

登園後、お着替えと朝の出席確認をした後、幼稚園の一番大きな部屋である「ゆうぎ室」に全園児が集まり、保護者の方にもその後ろにお座りいただきます。そして、いよいよ誕生会が始まります。

誕生者は一人ひとり名前を呼ばれると、大きな声で返事をして、照れながらもうれしそうに前に出て来て、舞台に用意された椅子に座り、つぼみ・つくし・赤・黄・青・緑組の誕生者全員がそろうのを待ちます。それから、保育者と一緒に『♪十人のインディアン』の曲に合わせて、その月に何人の誕生者がいるのかを数えていきます。

まず子ども達にプレゼントされるのは、かわいいティアラです。それぞれの頭にティアラをつけて、にっこり微笑む様子にこちらまでうれしくなります。うれしい笑顔と、会場に集まったみんなで『♪ハッピーバースデー』『♪たんじょうびの歌』を歌った後に、おうちの方にも舞台に上がっていただき、記念写真を撮ります。

次に、担任から誕生者へお祝いの言葉が贈られます。日頃、お友達とどんなことをして遊んでいるのか、どんなことを話してくれたかなど、様々なエピソードが繰り広げられます。担任の言葉ににこにこしたり、ちょっぴり恥ずかしそうな表情も見られます。話の終わりに必ず聞くことは、「大きくなったら何になりたいか。」ということです。大きな声で答える子ども達…。人気があるのは「お医者さん」「アイスクリーム屋さん」「ケーキ屋さん」「獣医さん」「モデル」「マニキュア屋さん」など、子ども達の夢が披露されます。またこの答えに、その時、その時の時代が表れているのがたいへん興味深く、楽しい夢が広がる瞬間でもあります。一方保護者席では、舞台でしっかり話す子ども達の様子に、目頭を熱くされる方もいらっしゃいます。

誕生会の最後は「お楽しみ」です。毎月、保育者が趣向を凝らしたものをみんなで楽しみます。今までにペープサート・パネルシアター・エプロンシアター、ゲーム（○×ゲーム）・劇（浦島太郎）などを行いました。中でも保育者が演じた「浦島太郎」の劇に子ども達は大喜び、会場はたいへん盛り上がりました。また昨年は、学園祭で年長組が演じた音楽劇「いばらひめ」の衣装を身につけ披露したところ、一緒に歌い出す子や、踊り出す子が続出し、大興奮する一幕もありました。

大切な、大切な誕生日。幼稚園では毎月このように、一人ひとりの成長を、楽しくお祝いしています。

誕生会の主役には、お姫さまのようなティアラが贈られます。

学年をこえた交流と学び合い

異学年との触れ合いは、お互いの距離を近づけ、学校生活に温かい一体感をもたらします。

豊かな情操と礼儀や節度ある態度を育むために、川村小学校では学年をこえた交流が様々な場面で行われています。今回は、その中から、1・2年生で行われている縁日遊び、全校通学班、会食指導（6年生と1年生、5年生と2年生）の様子を紹介します。

異学年との交流を通じて、上級生は下級生を思いやり、下級生は上級生への優しさに触れることができます。上級生へのあこがれの気持ちは、時と共にいつしか思いやりの気持ちへと変わっていきます。子ども達の心に清々しい成長を与えています。

縁日遊び

2年生は、生活科の一環として、毎年縁日遊びを行っています。

7名で一つのゲームを担当するため、グループ全員の協力が必要になります。意見がまとまらないこともありましたが、話し合いながら作業を進めていく姿には、2年生としての自覚や責任が感じられました。

当日フリールームには、5種類のゲームと1年生への手作りのプレゼントが並び、いよいよ縁日遊びがスタートしました。期待に目を輝かせた1年生がやってくると、遊び方を優しく説明したり、「楽しいゲームですよ。」と呼びかける元気な声が響き、どのゲームにも順番を待つ長い列ができました。ゲームはどれも大好評で、楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。1年生との交流を深め、さらにグループ活動を経験したことで譲り合い、思いやる心を学んだ2年生。後日1年生から届いたお礼のメッセージは、2年生にとって、何よりの宝物となりました。

1年生にとっては、入学当初から、あさがおの種をもらったり、通学班で毎日一緒に下校したりと交流を深めてきましたが、よりいっそう2年生に尊敬の気持ちを抱くことになった大きな企画となりました。

●1年生は2年生の手作りゲームに夢中です。（フリールームにて）

縁日遊び　1・2年生に感想を聞いてみました

●こんど、わたしが2年生になったら、またおもしろいゲームをかんがえます。そのときが、たのしみです。メダルもかがやいていました。（1年）

●えんにちあそびのおねえさんたちは、とてもやさしくて、ていねいにあそびかたをおしえてくれました。（1年）

●1年生が通学はんの時、「きょうはありがとう。」と言ってくれたのでうれしかったです。けんかもしたけれど1年生とやった時は、みんなでなかよくできました。1年生からのメッセージを読んで、「とてもたのしかったです。」と書いてあったので、うれしかったです。（2年）

●ゲームの遊び方を1年生に丁寧に説明しています。（1年生の教室にて）

●ゲームに挑戦すると、2年生がメダルにシールを貼ってくれます。

全校通学班

川村小学校は電車、バス等の交通機関を利用して登下校する児童が多いので、創立当初より方面別に通学班編成を行い、安全に安心して通学ができるようにしています。また、通学班を通して、交通機関の中では、座席を譲り合うなど、公衆道徳の指導も行い、ご家庭にも協力をいただいています。

学校外における公共の場で、マナーを上級生が教えることで、下級生は公共心を学んでいきます。さらに、同じ学園に学ぶ異学年のつながりとして、通学途中でお互いに自然な見守りを行い、学校生活の中に交流が生かされています。

●上級生は下級生が乗車することを確認しています。（目白駅ホームにて）

3月11日の東日本大震災は、保護者の皆様に、通学において多くの不安を抱かせることになりました。そのような中、この通学班のルールやマナーは、改めてその意義が大きく再確認されています。今年は、2学期始業式に、中学生、高校生との顔合わせも行い、輪を広げています。

川村学園の制服を着た児童生徒が誇りをもって助けあい、笑顔で帰宅できることを今後も続けていきます。

会食指導

6年生が1年生のお手伝いをし、面倒を見ることで、高学年としての自覚を持ち、下級生に対してお手本となれるよう意識することができます。さらに、下級生を思いやる優しさも芽生えていきます。そうした、6年生の姿を見て育った1年生が6年生になり、最上級生としての役割を示して行くと共に、自分がかつて受けた優しさを伝えていくことになります。こうした仕組みは、子ども達の心の成長に欠かせないものであるといえるでしょう。

●6年生は1年生の会食当番の仕事の様子を見守っています。（1年生の教室にて）

お手伝い

1年生&6年生より

●1年生に会食のお皿を渡すと、大きな声で「ありがとうございます。」と返事をしてくれます。その心のこもった返事に本当に感心しています。このお手伝いは1年生にとっても6年生にとっても、互いに教え合う良い機会だと思います。（6年）

●1年生の時、用意が遅くてあたふたしている私に、お姉さんが優しくお手伝いしてくれました。その時の感謝をこめて、スープを配ったり、小さな机を運んだり、校内着をたたんだりしました。こんな感謝の心のリレーが続くといいなと思いました。（6年）

●まるで妹の面どうを見ているようでうれしかったです。私自身、1年生の時に川村小学校に入って良かったと思えたように、1年生のみなさんにも感じてもらえるよう、良き6年生でありたいと思います。（6年）

●おそうじのおねえさんは、すごくはやくピカピカにしてくれてうれしかったです。（1年）

●かいしょくのおねえさんとおともだちになりました。その人がだいすきになりました。（1年）

2年生&5年生より

●私は妹がいないので、小さい子のお世話が不安でした。でも手伝っていると、すぐにお礼を言ってもらえてうれしかったです。いつのまにか不安がなくなり楽しくなりました。（5年）

●2年生の小さなほうきを見たら、わたしもお姉さんになったんだなとうれしく思いました。最後に大きな声で「ありがとうございました。」と言われ、明日もがんばろうと思いました。（5年）

●2年生の教室に行ってみると、机やいすが小さく、お会食の量も少なくてびっくりしました。初めはきんちょうしたけれど、2年生に「お姉さん」と呼ばれてうれしくなりました。これからも、2年生のお手伝いをして人から尊敬される人になりたいなと思いました。（5年）

●かいしょくのあとかたづけのために、おねえさんたちは早く食べておへやにもどってきてくれてうれしいです。（2年）

●おねえさんがおしえてくれたので、ぞうきんがじょうずにしぼれるようになりました。（2年）

自然教育の取り組み

体験学習を通して自然の恩恵を学ぶ。

中1総合的な学習「土」

中学1年生は、「土」というテーマで「総合的な学習」を進めています。中学の自然教育の第一歩となるこの学習では、すべての生命を支える「土」が、私たちの生活に欠かせないものであることを学びます。

まず、5月に千葉県君津市に「田植え」の体験に行きます。認定農業者の方々から、苗の植え方を教えていただいてから、田の中に入ります。はじめは、泥に足をとられてうまく前に進めずに悪戦苦闘していますが、泥の中での動きに慣れると、上手に苗を植えることができるようになります。生徒が植えた苗は、収穫まで認定農業者の方々に育てていただきます。生徒が体験するのは、米作りのほんの一部です。生徒は、農家の方が田植えの前にさまざまな作業をしてくださっていること、収穫まで水の管理や雑草取りなどの作業があることを学び、農家の方の御苦労や、植物を育てる土の重要性を理解していきます。そして、秋にお米となったものを手に取るとき、新たな感動と感謝の気持ちを持つことができます。

夏休み終盤、8月下旬には「蓼科総合学習」を行います。長野県にある学園の蓼科山荘を中心に、自然の中で「土」を学んでいきます。

広大な敷地で牧草を育て、飼っている牛や馬に与えている長門牧場では、動物とのふれあい体験やバター作りを行うとともに、良い牛乳には餌となる良い牧草が必要であり、その牧草を育むものこそ「土」であることを学びます。

八ヶ岳中央農業実践大学校では、大学校で採れたお米や野菜を使って飯盒炊さんをします。先生方に教えていただきながら、カレー作りや炊飯はもちろん、まき割りやかまどの火おこしも行います。八ヶ岳の緑の中で食べるカレーは、みんなで協力して作った分、格別においしく、さらに、野菜・ハーブ・ジャム作り・豆腐作りに分かれてショップ体験も行います。農作物の収穫や、材料からジャムや豆腐を作るという貴重な体験は、普段の生活では感じることのできない「土」との関わりを考える機会になりました。

このような体験学習を通して、私たちが「土」の恩恵を受けて生活していること学んでいきます。秋の学園祭でのグループ発表、さらに年度末の個人発表を行うことで、「自然」と「土」への理解を深め、2年生、3年生での学習につなげています。

中2総合的な学習「水」

野菜ショップでは、畑の草取りから始まり、じゃがいも、トマト、とうもろこしの収穫、ラディシュの種まきをしました。

中学2年生の「総合的な学習」の時間では、「水」をテーマに学習活動を行っています。水は生活・気候・風土を形作るうえでも、なくてはならないものです。そのため、生徒たちが自分たちの生きていく自然の世界を、水を通して把握していくことを目標としています。

まず「水について」という作文を書き、水に対して考える出発点としました。今年度は東日本大震災の影響で原子力発電所の放射能漏れによる水の汚染が大きく取り上げられ、世間の大きな関心事となっていました。作文の題材として、多くの生徒がこの出来事を記していました。もちろんそれだけではなく、理科的な見地に立ったものや、水力発電に注目していたものもあり、改めて水が私たちにとってきわめて身近であることを再認識する活動となりました。

こうした事前学習を行ったのち3泊4日の校外学習へと向かいました。

アルプスあづみの公園・栂池自然園では、自然の中を歩き、東京ではあまり観察することのできない植物や昆虫を間近で観察しました。栂池自然園では、長い歳月をかけて作り上げられた高層湿原を実際に目で見て、自然の力がどのように働くかということを感じることができました。雲や霧を間近に感じ、生徒たちも大きな驚きを見せていました。また、栂池自然園を歩いていると、ある生徒が「私より背の高い植物ばっかり」と言っていました。確かに、都心にある植物は景観や実用性を考えたものでは150cmを超えるような植物はそうありません。そうした意味においても、「自然の中に入る」ことは体験として非常に意味のあることだと感じました。

黒部ダムでも生徒たちは大きな驚きと感動を覚えたようです。近年、火力・原子力発電に次ぐ、水力発電の需要がますます高まっていることは間違いありません。特に日本は、自然環境のうえでも水力発電にとても適した環境であり、そのことを生徒たちに正しく認識させることを目的とした黒部ダム見学でしたが、圧倒的な迫力の放水に言葉を失う生徒も大勢いました。豊富な雪どけ水と豊かな山々があるからこそだということが、まちがいなく、それぞれの目を通して感じることができたと思います。

校外に出て自然に直接触れることのできる校外学習においては、知識と体験を相互に活かしながら生徒の能力を形づくっていくことを目標としています。

中3修学旅行「屋久島の自然」

中学3年生は6月27日から30日まで、鹿児島の指宿・屋久島方面へ修学旅行に出かけました。行程2日目の屋久島は、1993年12月、東北の白神山地と共に世界自然遺産に登録された島です。生徒たちは、自然の宝庫といわれる屋久島の特色、地形、気候、植物群系、固有種の動植物、遷移、四季などについて、意欲的に事前学習を進めてきました。そして、海を越えてその憧れの島を訪れることができるのを早くからとても楽しみにしていました。「ひと月に35日は雨が降る」と言われるくらい雨の多い屋久島ですが、晴天に恵まれました。

志戸子ガジュマル公園や千尋の滝を見学し、屋久島環境文化村センター、屋久杉自然館などで屋久島の自然の特色を学びました。展望台からは深い緑の山々と真っ青な海を眺め、生徒たちはその雄大な景色に感動していました。

翌日は、映画『もののけ姫』の舞台にもなった白谷雲水峡のトレッキングを行いました。1クラス3班に分かれ、各班にネイチャーガイドの方がついてくださり、10人前後のグループで行動しました。白谷雲水峡は、標高約800メートルの峡谷に屋久杉と照葉樹が混生し、地面や木の幹、さらには岩まで苔に覆われた森です。白谷広場を出発し、奉行杉、三本足杉、二代大杉、くぐり杉など、多くの美しい屋久杉に出会いながら歩を進めました。

偉大な自然のままの森の中で私たちは小さく、岩に手をかけ身体を押し上げ、土を踏みしめ、急勾配の斜面を慎重に下り、足場を確かめて踏ん張り、川を渡り、時に足を滑らせてびっくりし、登ったり下ったりを繰り返しながら約6時間歩き続け、屋久島の自然の大きさをおおいに実感しました。「さつき吊り橋」を渡り、「飛流おとし」の流れに涼しさを味わいました。ひょっこり現われたヤクシカを皆で声をひそめながら見つめる、嬉しい瞬間もありました。

時折、足もとのぬかるんだ湿地帯を通る中で、足場が不安定で歩きづらいにも関わらず、濡れた岩や植物をとても美しいと感じたりもしました。そのような時は、生徒たちも目を閉じ、長い年月を経て大地に根を生やし、雨に濡れて精気を宿す屋久杉に、それぞれ思いを馳せていました。そして、杉、苔、岩、花、…水に誘われて潤う本来のみずみずしい自然の色を眺め、冷たい川の流れにそっと手を入れて、こころを癒されていたようです。ここで、生徒の感想をいくつかご紹介します。

- トレッキングはハードでしたが、足腰を使いながら自然の偉大さを体感しました。
- 『もののけ姫』の森は、幻想的な深い緑の世界でした。神秘的な森でした。
- 緑に包まれて深呼吸をすると、私も自然の一部なのだと実感できました。
- 苔むす森で、全身にネイチャーパワーがしみこんできました。
- 木霊が見えたような気がしました。
- 三本足杉、奉行杉、…屋久杉につけられた名前と形がぴったりで面白く、東京にいる家族にも見せたいと思いました。
- 植物の生態系が本州とは違うとわかりました。
- 大人になったら、また来たいと思います。

この日も快晴で、鬱蒼とした木や苔に囲まれた原生林は空気がひんやりとしており、空気の清々しさの中を歩きながら楽しみ、改めて太古の森の自然の素晴らしさを実感しました。そして、永続的に自然環境を守ることの大切さを身にしみて学びました。

これまでの総合的な学習において、1年生では「土」、2年生では「水」をテーマとして自然について学んできました。3年生の修学旅行は、土の恵みも水の恵みも体感できて、自然学習の集大成となりました。生徒たちにはこれからも、自然の恩恵に感謝し、四季折々の美しさを愛し、いとおしみ守る姿勢を大切にしてほしいと願っています。

新しい教科紹介

高等学校での学びが将来を切り開く土台となるために。

1年生 クエストエデュケーション

高校1年生では、総合的な学習の時間において、「共生」をテーマに学習しています。その中でクエストエデュケーション企業探究プログラムに取り組んでいます。現代社会で様々な取り組みを続ける企業を題材として、「生きる力」を育ててもらうために取り入れました。

学習は4段階に分かれています。

まず、取り組みの内容を知るためのオリエンテーションから66社の企業（平成23年度は、クレディセゾン・スカパーJSAT・大和ハウス・森永製菓・テーブルマーク・日本経済新聞社）から各自で選んだ会社に入社します。

次に、インターンシップ体験として、アンケート調査などの実務を通して、各企業の事業内容や社会における役割、企業文化などに触れていきます。

そして、企業から出されるミッションに取り組んでいきます。受け取ったミッションを達成するために、様々なアイディアを出し合い、チームのプランにまとめ上げていきます。よいアイディアを出すための作業がブレインストーミングです。ミッションから連想したアイディアをどんどん書き出していきます。自由な発想のもとに出された意見はさらに次の意見を誘い出し、それにはずみがつくとちょっとした一言でも思いもよらないアイディアに発展することがあります。メンバー全員が協力して活発な意見交換の場を作り出すという、ブレインストーミングを通して、チームとしての企画案をまとめていきます。そしてミッションを達成するためにチームでまとめ上げたプランについてプレゼンテーションをします。

最後にまとめとして、これまでの活動を振り返り、体験を通して自分たちが何を得たのかを確認していきます。

このプログラムを通して、正解のない問いに対して自ら探究する姿勢や創造力を育むとともに、社会に対する理解と参加意識を醸成していきます。そして、自らの志向や適性を知り、職業に対する意識や価値観を育ててもらえたらと考えています。

キーワードを書き出して並べると、ある共通点がみえることも…

ミッションにそった企画案をクラスで発表します。

23年度のミッション

クレディセゾン …	世代を越えて生きたお金が回りだすあっと驚くポイントサービスを提案せよ!
スカパーJSAT …	心から信じられる仲間が100人出来るスカパーの新サービスを提案せよ!
大和ハウス …	人が集い、歓び、つながる100年続くまちづくり計画を提案せよ!
森永製菓 …	何気ない毎日にキラメキをもたらすお菓子のキャンペーン企画を提案せよ!
テーブルマーク …	“大切な人”をテーマにしたテーブルマークの広告企画を提案せよ!
日本経済新聞社…	読むことで世界が変わる10年後の日経電子版を提案せよ!

2・3年生 英語講座

本年度から英語に対するモチベーションアップとコミュニケーション能力の強化とを図り、2・3年の全生徒を対象に、毎週土曜日の1～2時間を使い英語講座を開講しています。講座はTOEIC、TOEIC Bridge、英検（準1級、2級、準2級）の5講座に分かれていて、生徒各自が自分の能力や必要性に応じて希望の講座を選択しています。

川村中学校では全員が英検にチャレンジしていますので、英語講座で英検を選択している生徒は中学校から継続してチャレンジしている場合が多いようです。同じ目標に向かう仲間とお互いに励まし合い、刺激し合いながら、さらに上級合格を目指し努力している姿は活気にあふれています。英検で目標の級に到達した生徒や合否で判定される英検の緊張感を好まない生徒には、TOEICやTOEIC Bridgeを薦めています。TOEICやTOEIC Bridgeは自分にあった目標スコアを設定することができ、その成果をスコアで把握できるため英語が得意な生徒だけでなく苦手意識を持っている生徒も自分の英語力を確かめ、さらに高めていこうとするモチベーションアップにつなげることができるからです。

TOEIC対策にしても、英検対策にしても全員で同じ課題に取り組む、いわゆる授業という形式ではなく、語彙力をつけたい生徒は語彙の強化に努め、文法を見直したい生徒や、読解力を高めたい生徒はそのための学習に力を注ぐといったように、必要な課題をそれぞれが見つけて自ら学んでいく姿勢を大切にしています。学習の成果は定期試験による評価からではなく、自らの努力の結果生み出された目標級合格や取得スコアによって判断できるため、開講当初は受動的だった姿勢にも少しずつ積極性が見られるようになってきました。

TOEICとTOEIC Bridgeについては、希望者が10人以上集まればいつでも学校で受験ができるように制度を整えました。高校1年生や英語講座TOEICやTOEIC Bridgeを受講していない生徒でも受験ができるようになっていますので、一人でも多くの生徒にチャレンジしてもらい、自分の英語力を磨いて欲しいと思っています。実際に7月に第1回目の校内受験を行いましたが、高校1年生から3年生までの多くの生徒が参加をしてくれました。

国際化がすすむ社会においてのみならず、日常・社会生活においても使える英語力を持つことは将来の可能性や選択肢を広げる大きな助けとなります。この英語講座を通し、英語の学習に対するだけではなく、これから進んでいく自分の夢や希望に対しても、自らで課題や目標を見つけ、それに向かって何をすればよいのかを考え実践できる力を養っていくことを期待しています。

高3 特別講座

大学受験を控えている生徒の学習を支援することを目的に、高校3年生の希望者に対し、週に2回の特別講座を開講しています。各講座では受験に対応した通常の授業では扱うことのできない内容を学ぶことができます。前期は最大2講座、後期は最大4講座まで受講でき、各自の大学受験に合わせた選択により、得点を上げる力をつけていきます。

例えば、「日本史演習＋α」では、古代から中世までの仏教史を中心とした日本文化を学習します。また、「現代文入試問題演習」ではGMARCHや早稲田大学などの過去問題を使用し演習授業を行い、入試の実践力を養っています。その他にも発展的な問題演習をこなす「数学演習ロ」、音大受験対策を行っている「音楽演習」などが開講されています。

単位や成績には関わらないという特徴に加え、午後の授業がない月曜日と水曜日の放課後の時間を使っていることから、受講している生徒からは受験に向け、自ら学習しようという強い気持ちが感じられます。

後期講座紹介

日本史演習＋α講座
世界史演習＋α講座
数学演習ロ
数学B ～数値計算とコンピュータ～
音楽演習
受験生体力向上講座
現代文入試問題演習
漢文読解法

活躍している学生Ⅱ

復興への第一歩、自分のできることから社会に目を向ける。

大学ではキャリア教育の中で、学生の社会的、職業的自立を形成していく上で、自分を知ること、社会を知り、働くことの意義を知ること、どう意識を持ち実践していくのか等の指導を行っています。自分の人生と社会との関わり・繋がりを考える上でこのたびの大震災によってもたらされた社会状況は、学生たちにとってより具体的に「自分の今までと、これから」を考える機会となったのではないでしょうか。震災当日以来、その中で学生達が主体的に考え行動する場面を多く見ることができました。

ここで、学生達の活躍について紹介させていただきます。

3 地震発生当日～ 大学にて

月11日は授業期間中ではありませんでしたが、50名の学生が学内で活動していました。揺れの最中は身の安全を確保し、揺れが収まった後に非常放送に従いグラウンドに集合して負傷や体調不良の有無の確認を行いましたが皆、不安な表情でありながらも冷静に行動していました。その後、一階建ての10号館学生ホールに待機場所を移すとともに、大学として飲料水の確保、トイレ排水の確保、照明の確保、公衆電話を利用しての家庭・保護者との連絡、各学生の帰宅方面の把握、鉄道運行状況の把握等と、その状況において出来得る限りの尽力を重ねていく中で、その場の誰もが「いつかは起こるかもしれないと言われていた大地震が本当に来てしまったのだ。」という本来は考えたくないことを実感として認めざるを得ない状況に包まれていたのです。頻繁に続く余震も精神的な負担となっていましたが学生達は学部学科学年を超え互いに励まし合っていました。その後、保護者が迎えにいらした学生もいましたが、結局32名の学生と4名の教員及び半数以上の職員が学内に宿泊することとなりました。早速に夕食の確保という課題に直面したわけですが、非常食カンパンも用意されていますが、「緊急的に生活文化学科栄養士養成課程の実習食材も活用しよう。」ということになった時に6名の生活文化学科学生が調理作業をしたいと申し出てくれました。もちろん授業期間中ではないので多種多様な食材の在庫はありませんが、助手の指導を受けながら心のこもったおにぎりと味噌汁を作ってくれました。そしてそれらが学生ホールに運び込まれると調理をしてくれた6名に対して学生達から感謝の拍手が湧き起こりました。非日常的な状況の中で皆の心の中に明かりが灯った場面でした。

図書館での落下蔵書復旧の取り組み

本学図書館の13万冊の蔵書の内、約8割が書架から落下してしまい床一面が書籍で埋まる状態となってしまいました。3月中に教職員の手で復旧したものの、4月の余震により再び同じ状況となってしまいました。授業期間中でもあるので早期に復旧しなければならず、再び職員のマンパワーにより作業を始めましたが、その時に校内放送を使ってキャンパス内の学生達にボランティア応援を呼びかけてみましたところ15名が作業に加わってくれました。また司書資格課程の履修学生達も作業期間中に延べ49名が参加してくれました。書籍を書架に並べる作業と言っても、ただバラバラに並べるわけではありません。学生達は図書館職員から日本十進分類法の配架の要領について説明を受け、熱心にもくもくと取り組んでくれました。そして図書館は5月2日から開館することができました。

黄鶴館2・3・4階図書館の当時の状況

学生達の応援ボランティア

日本赤十字社への義援金のための呼びかけ

卒業式を直前に控えた4年生の卒業パーティー実行委員の学生達から、震災により被災された方々に支援の気持ちを届けたいとして、学内に募金箱を設けて日本赤十字社へ義援金を贈りたいと提案がありました。

実行委員にとっては長い時間をかけて準備を進めてきた卒業パーティーについて、大震災という社会事情を受けて中止という重い判断を自分たちでしたことは、大人として成長したことを感じさせてくれました。その上で「被災された方々のために」として社会に目を向けた提案をしてくれたことはとても心強く思いました。震災の翌月から社会人となられた卒業生の皆さまのご活躍を祈っています。

実行委員学生達の意思により始めた募金は学生・教職員に広く共感され3月31日現在で206,467円となり4月6日に日本赤十字社へ贈られました。

5 福島県相馬市へのボランティア参加

月に千葉県社会福祉協議会から本学教育学部社会教育学科に対して、福島県相馬市への学生ボランティア派遣の要請がありました。作業内容は泥かきや写真の洗浄等とのことでした。

学科では社会福祉士、精神保健福祉士の科目履修学生から希望を募り、社会教育学科の学生6名と文学部心理学科の学生3名が保護者のご了解を得た上で参加してくれました。本学の大震災に伴う被災支援も外に向けた人的支援という段階になりました。

ここで、実際にボランティアに参加した学生の報告を掲載いたします。

『東日本大震災ボランティアバスに参加して』

写真の持ち主の方を想い、
丁寧に汚れを取り除く作業

千葉県社会福祉協議会の大学生向け東日本大震災ボランティアバスに参加し、東日本大震災から100日目の6月17日から1泊3日で福島県相馬市にボランティアに行ってきました。東日本大震災は日本の歴史に残る災害であり、福島県相馬市は津波の被害を大きく受けました。相馬津波による瓦礫の撤去作業は終わっていましたが、かつてあった住宅地は津波により流され、寂しく虚しい気持ちでいっぱいになりました。

活動は1日目が津波による床下泥かき作業、2日目は写真洗浄を行いました。床下泥かき作業は家の床下に入り泥を丁寧にかく作業です。津波により堆積した泥だった為、重く湿った土で大変な作業でした。2日目の写真洗浄が心に残りました。そこには笑顔で洗浄された写真を持ち帰られる姿があり、たくさんの被災者の笑顔が溢れていたからです。

写真洗浄は1日目の床下泥かき作業のように力仕事ではないので、女性や中高生でも出来る作業ですが、簡単な作業ではありません。全ての写真が復元できるわけではなく、1枚1枚丁寧に復元できる写真を探し、1つのアルバムから復元できるのは1枚から2枚だけでした。1枚でも多くの写真が持ち主のもとに帰るように精一杯作業を行いました。東日本大震災は多くの被害を受けましたが、ボランティアを行うことで改めて人々の少しの協力やちょっとした活動が復興に繋がっていくと思いました。

洗浄作業が終わった写真は、
被災された方の元へ

私たちは実際に被災地に行くことでテレビでは分からない実際の現場を体験し、たくさんの事を学びました。そして、復興活動はまだ始まったばかりであり、今回で終わらせるのではなく継続的に復興支援に取り組み、少しでも早い復興に協力していきたいと思いました。そこで、東日本復興支援部隊として学園祭で今回のボランティア活動報告会を行い、学園祭の売り上げを福島県相馬市に寄付することにしました。また今回のボランティアや学園祭だけではなく、引き続き支援を続けていきたいと思います。

教育学部社会教育学科2年　蔀　理紗

このように学生達が、このたびの大震災に伴う社会事情を目の当たりにして、これが自分たちを取り巻く現実の状況なのだと認識をしました。そして、社会に目を向け、社会と自分とは繋がっているのだということを大人として自覚する機会となったのではないでしょうか。これから社会に出ようとする学生達が自分の未来と他者の未来は相互に関わり合って社会が形成されているのだということを感じて欲しいと思います。そして、このたびのように社会に目を向けた時に、自分が主体的に発信できることや行動できることを考えた中で、感謝、奉仕、共生の心が実感として湧いてきたのではないでしょうか。

― 創立90周年記念事業 ―　中高校舎リニューアル工事　いよいよ完了

中高校舎の約1年半に及んだ耐震強化と内外装の全面改修工事が、いよいよ平成23年12月に完了します。工事では、耐震性を高めるために、壁や柱の厚みを充分に増し、阪神淡路大震災後の新耐震基準を充分にクリアした設計の安全な校舎となっています。

また新施設では、現代の教育環境を追及し、より学習効果を高められるよう整えました。ここで使用を開始した新施設の特色を紹介します。

創立90周年を記念し、第1校舎3階に記念室を設置しました。

調理実習室

教員の手元カメラの映像が、4台のプラズマディスプレイに映し出される調理実習室1。IHクッキングヒーターの特性を体験しながら快適に調理ができる調理実習室2を配置。

視聴覚室

リア投影式120インチワイドスクリーンを設置し、音声は5.1chサラウンドシステム。約160名を収容。

普通教室

窓から自然な陽射しが入る明るい教室。リニューアルを機会に、机・椅子・黒板・ロッカー・コート掛けを全て新調。

ラウンジ

70席あるゆったりとしたカフェのような雰囲気。液晶テレビ、トロフィー棚、暖炉のオブジェを設置。

グラウンド

美観と快適な性能を備えた人工芝に張替え、体育の授業やクラブ活動で使用。陸上競技用にゴムチップエリアあり。

『編集後記』

まず、記述にあたり3月11日東日本大震災により被災された方々に心よりお見舞い申しあげます。本学でも当日は、多くの在校生が帰宅困難となり校舎に宿泊することになりました。本学では、避難訓練や備蓄庫の完備など日頃から非常時に備えております。そのことを含め「学園の災害対策」として特集を組みました。また、大学においては、東日本大震災ボランティアへ参加する学生の様子が報告されています。

高校では、今年度より新しい教科としてスタートしたクエストエデュケーションや英語講座を、幼稚園では、新たなかたちとなった誕生会を紹介しています。

昨年度同様年1回の発行ですが、より一層の内容の充実を図るよう努め、これからも学園の情報をより分かりやすく読みやすくお伝えしたいと思います。

黄鶴　第20号（年1回発刊）
平成23年11月10日 発行
発行人　学校法人 川村学園
総合デザイン　荻原　延元
編集　黄鶴編集委員会

表紙挿絵　ボタニカルアーティスト　山根悦子さん　プロフィール

前号に続き、表紙挿絵のご協力をいただきました。ボタニカルアート「サクラソウ」は花びらの形や色もそうですが、葉の特徴である深いしわが写実的に表現されています。サクラソウは春を象徴する花として古くから人々に愛されてきました。そのサクラソウで黄鶴を飾れることに深く感謝いたします。

＊

川村中学校・川村高等学校・川村短期大学保育科を卒業後、武蔵野美術短期大学を卒業。

現代童画会会員・日本植物画倶楽部会員。第12回ハント国際ボタニカルアート展入選、英国王立園芸協会フラワーショー準金賞。

絵本作品として、「ゆうがたさくはなおしろいばな」（月刊「かがくのとも」2010年7月号）を出版。また「学研もちあるき図鑑」―まるごと日本の季節―（2011年4月出版）、―まるごといつもの食材―（2011年7月出版）のイラストを手がける。

学校法人 川村学園
〒171-0031　東京都豊島区目白 2-22-3　03-3984-8321（代表）
URL http://www.kawamura.ac.jp/